巻頭言

地域連携と院内連携
－大切な２つの連携－

理事 関　利盛

新年明けましておめでとうございます。

2011 年を迎えるに際して、一言ご挨拶申し上げます。

主に後方支援を目的に当地域連携センターは 2008 年に設立されました。その後センターを介しての受診数は右肩上がりに増加しております。利用される施設数も増加しており、大変ありがたいこととまずは感謝申し上げます。

さて、ここ数年の医療をとりまく社会情勢を考えますと、医療費の削減、人口構成の変化、高齢化が指摘されております。特に高齢化の波は徐々に進行しており、この傾向は国立社会保障・人口問題研究所の都道府県別将来推計人口によると、2010 年から 2025 年（団塊世代の全員が 75 歳を超える）までの 15 年間で、65 歳以上の高齢者人口が日本全体で 694 万人増加するとされております。高齢化社会の到来は何を意味するのでしょうか？まず頭に浮かぶのは悪性疾患、癌患者の増加です。さらに医療技術の進歩と相まって癌患者さんも長期にわたる経過観察が必要となってくることが予想されます。また、癌だけではなく糖尿病・腎機能障害・心血管障害などの慢性疾患も増加することが予想されます。つまり、高度な医療あるいは急性期の治療を行った後に長期経過観察が必要となる患者さんが増加することが予想されます。従来は、これらの一連の経過を一施設で行っているのが現実でした。当市立病院も例外ではありませんでした。しかし、このような対応ですと一般診療だけで精一杯の状態となり、急性期の対応が不十分となることがしばしば発生していました。そこで、一定期間の高度な治療あるいは急性期の治療を受けた患者さんで、状態が落ち着いた方を地元のかかりつけの医療機関と共同で治療することで、患者さんにとっては複数の主治医が存在し、急性期病院では新たな治療を必要とする患者さんの受け入れが可能となり、地元の医療機関では患者さんの状態に応じた医療が提供できると考えられました。

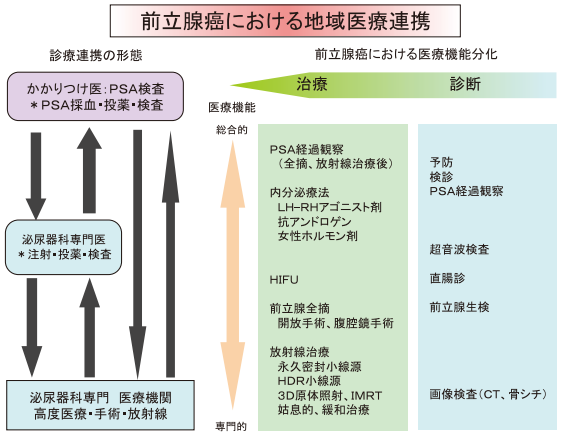

図１

たとえば、前立腺癌の地域連携パスです（図１）。ご存知のように前立腺癌の疑いは最近では採血の前立腺特異抗原（ＰＳＡ）を行い診断しています。これは泌尿器科専門病院でなくても、検診でも採用されているような検査です。このＰＳＡ高値を訴えて受診される患者さんに対して、専門病院は生検を行い癌かどうかの診断を行います。癌の場合は staging の後に、stage に見合った、その患者さんに最適な治療、たとえば根治手術（開腹、腹腔鏡下手術）、放射線治療、ホルモン療法などを行います。癌でない場合は、6ヶ月後にＰＳＡ再検を行い異常があった場合は再紹介していただくようなシステムです（図２）。

現在、地域連携パスはこの前立腺癌だけではなく脳卒中地域連携パス、冠動脈ステント留置後の地域連携パス、大腿骨近位部骨折地域連携パスなどがあり、地域医療機関との連携を強化しているところです。この地域連携パスを円滑に進めて行くには 3 つの条件があります。1：連携パスを一定の期間で見直すこと。2：地域の医療機関と連携元の病院とで勉強会を定期的に行うこと。3：一方的な対応ではなく、双方向性の対応が取れること。以上の 3 点です。この中で最も大切なのは、地域医療機関と連携元医療機関がお互いに顔を見せ合える関係を作っていくことです。一方的な押しつけではなく、お互いの言い分をはっきりさせることが大切なことだと考えています。つまり、お互いの信頼関係です。地域医療機関で経過観察中の患者さんの状態が変化したときなど、困ったときはお互い様なので、連携元医療機関では、患者さんの受け入れを即座に行える体制を作る必要があります。このためには、医師だけではなく、看護部、放射線部、ＭＳＷなどとの院内連携が必要になります。当然医師同士の院内連携も必要となります。つまり、地域連携を行う上で必要なのは他施設との連携も大事ですが、院内の連携も大切だということです。

たとえば、糖尿病、脳梗塞術後で虚血性心疾患もある、重篤な合併症のある膀胱癌の患者さんが根治治療を求めて他の医療機関から紹介されたケースを考えてみましょう。このような場合、院内の連携が極めて重要な意味を持ちます。単科での対応ではなく複数科での対応が必要になるからです。各科の協力の下根治治療がうまくいき、術後の経過も順調であったとしても、患者さん自身は身体的にも、精神的にも消耗していることが多く見られます。このような場合、身体的には医師や看護で対応できますが、精神的、社会的なダメージに対して少しでも回復の役に立てればと院内ボランテイアの方々が企画するイベントや、ＭＳＷの方々と地元に帰る方法について相談することもあります。地元の医療機関に帰すことの出来る身体的、精神的状態にすることが必要なことと考えています。

安全で良質な医療の提供を目指して、なおかつ急性期病院の役目も果たし、身体的にも精神的にも安定して地元の医療機関に戻すことを目指し今年も頑張ります。

今後とも当地域連携センターをよろしくお願いいたします。

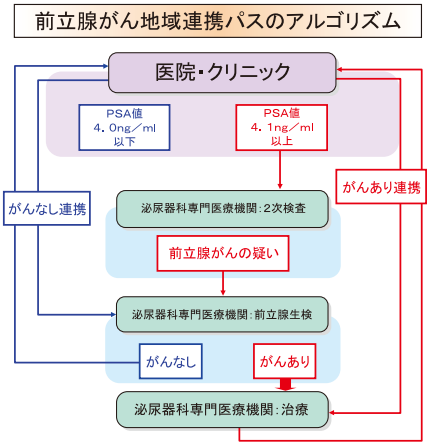

図２